

| | |
|------------------|---|
| Title | 福澤先生の学問論 |
| Sub Title | |
| Author | 野村, 兼太郎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1947 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.40, No.7/9 (1947. 9) ,p.367(1)- 388(22) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19470901-0001 |
| Abstract | |
| Notes | 慶應義塾九十周年記念論文集：第一輯 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19470901-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生の學問論

野村兼太郎

慶應義塾創立九十周年記念に際し、創立者福澤先生の「學問」に對する考察及びその態度について少しく検討してみたいと思ふ。直接先生の學問そのものを考察の對象とするのではなく、先生が學問を如何に解釋し、又これに對し如何なる態度を以つて臨まれたかを問題とするのである。従つてそれは先生の人生觀・世界觀とも相關聯する問題である。

私は今このことを吟味するに際し、學問と實踐といふ最も普遍的な問題からはいつて行かうと思ふ。これについて所謂學問のための學問といふ立場と實際に役に立つといふ目的をもつ學問の立場とがある。前者の場合は直接役に立つかどうかといふことは問題としない。たゞ知識を求める——眞理を知るといふことに満足して、それが實際に役立つかどうかは全然問題としない。後者はいろいろな立場を包含する。直接實際の生活それ自身に役立つといふ卑近なものから、國家のため、人類のために役立つといふ大きな目的をもつものまで、多くの立場が存し、何れも學問の實踐性の必要を高調するものである。前者は兎もすれば空理空論に陥る虞れがあり、後者は學問を卑賤化又は誤用する

弊がある。

福澤先生は學問の實踐性を重要視する。

「學問とは唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を樂み詩を作るなど、世上に實のなき文學を云ふにあらず、これ等の文學も自から人の心を悦ばしめ、随分調法なるものなれども、古來世間の儒者和學者などの申すやう、さまであがめ貴むべきものにあらず、古來漢學者に世帯持の上手なる者も少く、和歌をよくして商賣に巧者なる町人も稀なり、これがため心ある町人百姓は其子の學問に出精するを見て、やがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり、無理ならぬことなり、畢竟其學問の實に遠くして日用の間に合はぬ證據なり、されば今斯る實なき學問は先次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き實學なり、譬へばイロハ四十七文字を習ひ、手紙の文言帳合の仕方算盤の稽古天秤の取扱等を心得、尙又進て學ぶべき箇條は甚多し、地理學とは日本國中は勿論世界萬國の風土道案内なり、究理學とは天地萬物の性質を見て、其働を知る學問なり、歴史とは年代記のくはしきものに萬國古今の有様を詮索する書物なり、經濟學とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり、修身學とは身の行を修め人に交り此世を渡るべき天然の道理を述たるものなり、……右は人間普通の實學にて人たる者は貴賤上下の區別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、此心得ありて後に士農工商各其分を盡し、銘々の家業を營み、身も獨立し家も獨立し天下國家も獨立すべきなり」(「學問のすゝめ」初篇、明治五年)。

勿論この文章は一般に學問の重要性を知らせんがために書かれた通俗書であるから、卒然としてこれを讀めば、江戸時代の儒者——殊に石田梅巖などと大なる差違を認め得ないくらゐである。特に後の方の「士農工商各其分を盡し家業を營み」の一節に至つては、舊幕時代の議論を彷彿せしむる。

しかもなほこの文章は先生の學問に對する考へ方の要領を示すものである。先生は學問は實學でなければならぬといふ。學問は難解の書を讀んだり、詩歌を作つたりすることではない。それらは第二次的なもの、慰みに過ぎないものであるといふ。この議論は當時なほ一般に行なはれてゐた誤れる學問觀を是正せんがために特に強調したものであらうが、同様の態度は後年においても支持されてゐる。例へば後年に年月不詳の濱野定四郎・渡邊久馬八宛書簡において、塾生が詩文集を印行したことについて、痛く叱責されてゐる。

「塾中に餘興漫録とか申し詩文集出來候由、右は生徒の洒落、私にいたした事なれば、敢て非難すべきにもあらず御勝手次第馬鹿らしき事と評するまでのことなれ共、若し或は其集中に慶應義塾の名ありては以ての外の次第、假令表題にても、或は文章の中にも、文詩は社中の最拙なる者、加ふるに方今の時節フヒジカル、サイヤンスを勸めても尙振はざるの折柄、其塾中の社員が詩文集を版にいたしたとは、咄々怪事、老生は之を聞て耻死せんとす、何者の馬鹿が右様のタワケを企てたるか、公然と談するよりも竊に可相成は一冊も人に示さぬ様いたし度、若し其出版に費用掛りたるならば、老生之を償ひ可遣、宜敷御取計可被下候」

右の書簡中注目すべき言葉は詩文に對するものとして「フヒジカル、サイヤンス」といふ文字を使用してゐることである。「學問のすゝめ」において實學といはれてゐるものは、地理學・究理學・歴史・經濟學・修身學であるが、それらはすべて實體を檢討する學問の意味で、フヒジカル・サイヤンスのうちに入るものと考へられたやうである。その點についてはなほ後に述べる。

従つて先生は學問を實際に役に立つものといふ點に重きを置いて述べられてゐる。それならば實際に役に立つとは何か。先生は「専ら勤むべきは人間普通^{Practical}に近き實學なり」といはれる。日本語の表現は不十分であるから、この句は

二様に解せられる。一つは全體を實學の説明とみ、實學とは人間普通日用に近き學問であり、讀み書き算盤であると解するもので、この意味に解すれば江戸時代の一般儒者の意見と同様であり、たゞ彼らはこれを特に學問とはいはなかつただけである。他の一つの解釋は實學のうち人間普通日用に近きものを第一に學ぶべしの意である。勿論先生のいふ意味は、他のところにはあらはれた議論に依つても明かであるやうに後者であり、實學の意は廣い意味である。單に實際直接日常必要なものだけを實學といつたわけではない。

明治六年七月二十日附の中上川彦次郎宛の書簡の一節に、

「私の説は今の學者讀書に耽る勿れ、書に耽るも酒色に耽るも其罪は同じ、唯有眼の人物にして始て讀書中に商賣を爲し、商賣中に書を読み、學で富み富て學び、學者と金持と兩様の地位を占め、以て天下の人心を一變するを得べきなり」

といふ一節がある。もとより書簡の如きは、所謂人をみて法を説くの種類であつて、字義通りに解釋することは出来な
いが、福澤先生が當時一般であつた町人學問無用有害論に對し、その有用なる所以を明かにし、一般實業界に學問有用の實を示さんとして、特にこの種の訓誡を實業界に出でんとする門下生に與へたものであらう。この書簡に依つても先生が學問に一種の功利主義的意義を認めんとしたことは明かである。少くとも實學と呼ぶものには、そこに實利的なもの存在することを必要とした。このことは門下の一人が家庭の事情に依つて中途廢學せんとするに際し、その父に與へられた明治十八年十二月十一日付の書簡中にもみられる。

「近年世間の様子もむかしに替はり、假令へ商業の人にも一通り學問の心掛無之ては迎も立行難きは申までも無之、畢竟むかし流儀の儒者風にて學問は却て家業の妨など申恐も出來候事なれども、今の學問は昔しに異なり、學問は實學にして慰にあらす又戯にあらす、學問即ち商賣の資本とも可申時勢に相成候からには、令息におゐても今後三ヶ年斗も御勉強ありて數學簿記法を始として外國の商賣學一通りは所得相成候様いたし度、今の日本の商人が古風に從て商賣するは、日本の帆前船を以て遠州洋を渡るに異ならず、夢中むやみに航海して、或は無事なることもあるべきなれ共、左りとは又危き事共に被存候、」

かくの如き實利主義的見方は實際に學問を修得した場合、その學問が高度であればあるほど、現實と矛盾する。高度の學問が低度のものよりもより多くの實利を與へるものとは限らない。福澤先生が往々にして世の誤解を招き、拜金宗の本山の如くいはれたのも、あまりに實利主義的な學問を鼓吹されたためであらう。子供を教育することを商業に資本を投ずると同様とするが如きは甚だ危険な比喻であり、娘に遊藝を仕込んで左圓扇で暮さんとする貧欲な親と同様な心事を奨励するものである。先生は學問が現實に有用なことを一般に熟知せしめんがために、敢て實利主義的な面を強調したのであつて、その眞意ではなかつたのであらう。

先生が學問を以つて人生最必須のものなりとし、
「人は生れながらにして貴賤貧富の別なし、唯學問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり、無學なる者は貧人となり下人となるなり、」(「學問のすゝめ」初篇)

とまで強く學問奨励を主張する、以所は、單に上述の實利ありといふことだけではなかつた。學問研究の意義に二つの點を認める。一つは人間社會のこと萬事學理以外のものはなく、この學理原則を追及し擴充するにつれて文明は進歩するといふ考へである。(「福翁百話」三十三、「人事に學問の思想を要す」)。この考へは海保青陵などの「理外と云ふことあるはづなし、理外ありては理と云ふ者にあらす、外のなきを理と云也、天地のことは皆理也」(「天王談」)といふ議

論と同一傾向のものであり、青陵が「自然とは理のこと也、理こそ自然也」(同上)といったのと同じく、福澤先生もその學理原則といふのは、大體自然科学的法則をさすのであつた。この點についてはなほ後に述べる機會があらう。従つて人間日常の生活、「下女が飯を炊ぎて下男が水を汲み薪を割るも自から學理の中に働く」のであつて、その學理を知つて置くことは極めて有用であると主張される。

右の主張にはなほ實利的な面がないではないが、第二に先生が學問研究は終に一種の悟りに到達すべき點を指摘されてゐることは注意すべきである。上述の如く學理原則は必ずしも高遠なところのみ存するのではない。日常卑近のうち存する。この卑近のことを學理に依つて説明してゆき、次第に高尚のものに近づき得るとして、次ぎの如く述べて居られる。

「獨り文明流の新事物のみに限らず、眼前に在る一木一石一紙一毫の微も之を眞理原則に照らして、其性質を説き、其效用を明にし、次第々々に其理を推究して玄妙に入り、玄之又玄なるものに達すれば、人間の方寸に宇宙を包羅して、日月も小なり芥子も大なりとの思想を生ずるに至る可し。」(「福翁百話」七〇、「高尚の理は卑近の所に在り」)。

論じてこゝに至れば、先生のいふ實際に役に立つの意義は單に日常實踐に役に立つといふことばかりでなく、況んや商業における資本の如く利潤を生むといふことではないことは明かである。さらに深く人生における眞理を體得するにあつたことが認められよう。又このことから先生の人間安心論を生じた實際の體驗でもあつたのであるが、その點についてはこゝでは深く觸れない。要するに學問の實踐性とは單にその知識が直ちに日常生活に役立つかどうかといふ卑近な技術的面だけをいふのではなく、その根本に存する學理の探求にあることは明かであらう。従つてこゝに問題を一步進めて、先生が實學と稱するものが如何なるものであつたかをさらに明かにする必要がある。

二

學問を人間修養の途であるとする議論は東洋における學問の本義であつて、もし福澤先生の學問に對する態度を單に上述の如く人間安心の途に到達するものであるとするならば、それは江戸時代の儒者の議論と幾許の隔りもない。そして又先生本來の意圖にも反し、却つて逆轉するものとならう。先生は東洋學を否とする者である。

「我輩は西洋文明の學問を修め之を折衷して漢學說に附會せんとする者に非ず、古來の學說を根柢より顛覆して更らに文明學の門を開かんと欲する者なり、即ち學問を以て學問を滅さんとするの本願にして、畢生の心事は唯こゝに在るのみ。」(「福翁百話」三十四「半信半疑は不可なり」)。

これは誠に強い言葉であつて、妥協を許さないものがあり、又先生の信念を示すものである。従つて先生はしばしば東西の學を比較して、東洋學の非なる所以を力説される。今その主なるものをいくつか先生の言葉のまゝに引用して、讀者の參考に供する。

「抑も宇宙萬有を支配するものは自然の眞理原則にして人事も亦固より此數理の外に逸するを得ず、然るに今東洋西洋の學說を比較して、其大意の在る所を見るに、兩者おの／＼由て來る所の根本を異にし、彼れは陰陽五行の空を談じて萬物を包羅し、此れは數理の實を計へて細大を解剖し、彼れは古を慕うて自から立つことを爲さず、此れは古人の妄を排して自から古を爲し、彼れは現在のまゝを妄信して改むるを知らず、此れは常に疑を發して其本を究めんとし、彼れは多言にして實證に乏しく、此れは有形の數を示して空を云ふこと少なし。」(同上)。

「竊に案するに今の文明學を文明として、之を和漢の古學に比較し、兩者相互に異なる所の要點を求めば、單に物理學の根本に據ると據らざるとの差異あるのみ。」(「福翁百話」十七「物理學」)。

「古來東洋西洋相對して其進歩の前後遲速を見れば、實に大造な相違である。双方共に道德の教もあり、經濟の議論もあり、文に武におの／＼長所短所ありながら、叔國勢の大體より見れば富國強兵、最大多數最大幸福の一段に至れば、東洋國は西洋國の下に居らねばならぬ。國勢の如何は果して國民の教育より來るものとするれば、双方の教育法に相違がなくてはならぬ。ソコで東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは、有形に於て數理學と、無形に於て獨立心と、此二點である。彼の政治家が國事を料理するも、實業家が商賣工業を働くも、國民が報國の念に富み、家族が團欒の情に濃なるも、其大本を尋れば自から由來する所が分る。近く論すれば今の所謂立國の有らん限り、遠く思へば人類のあらん限り、人間萬事、數理の外に逸すること叶はず、獨立の外に依る所なしと云ふ可き此大切な一義を、我日本國に於て軽く視て居る。是れでは差向き國を開て西洋諸強國と肩を並べることが出來さうにもしない。」(福翁自傳「岩波文庫本一九七—八頁」)

以上の諸句は何れも晩年の諸著作中にあらはれたものであるが、冒頭に引用した「學問のすゝめ」初篇の學問論及び同書全體の構成よりみて、先生が上述の如き考へをもたれたのは「自傳」に示すが如くかなり早く慶應義塾創立間もなき頃と推測される。安政五年末奥平藩の招きに應じて鐵砲洲の中屋敷に蘭學塾を開いた頃は未だ最初の渡米前であり、はつきり上述の如き考へが出來上つてゐなかつたらうが、おそくも慶應頃にはほと形成されてゐたものといへよう。

上掲の引用に依つても明かであるやうに先生のいふ實學の意味はたゞ單に實際に役に立つといふ通俗の意味ではなく、もつとより深いものにあつたことを認めることが出来る。即ち數學・數理學・物理學・フイジカルサイヤンス等の言葉を以つて表示されてゐるものは、近世文明の發達の基本たる自然科学的研究を意味する。換言すれば學問の根

本に自然必然的な法則の存することを認め、それらの諸法則は實驗その他に依つて實證されるものである。しかもそれらは單に人間の頭腦中で推論的に證明される空論ではなく、現實に數的に具體的に證據立てらるゝものでなければならぬ。學問の發展はかゝる自然法則を發見し、明確に體得するにあり、文明の進歩はこれらを具體的に利用し、人間生活を豊富ならしむるにありといふのである。従つて福澤先生の哲學には、近世實證哲學の影響を多分に認めることが出来る。

たゞこゝに注意すべきことは、先生が東西兩洋の學を比較し東洋になきものとして「無形に於て獨立心」といふことを述べて居られることである。勿論このことは學問の本質に直接には關係がない。しかし「文明」といふ問題を通じて兩者は密接に結びつけられる。前述の如き實學を攻究することに依つてのみ文明の進歩は成就する。而してその文明は獨立的國家においてのみ可能である。

「抑も文明は相對したる語にて、其至る所に限あることなし、唯野蠻の有様を脱して次第に進むものを云ふなり、元來人類は相交るを以其性とす、獨歩孤立するときは、其才智發生するに由なし、家族相集るも未だ人間の交際を盡すに足らず、世間相交り人民相觸れ、其交際愈廣く、其法愈整ふに従て、人情愈和し智識愈開く可し、文明とは英語にて『シウキリゼイション』と云ふ、即ち羅句語の『シウキタス』より來りしものにて、國と云ふ義なり、故に文明とは人間交際の次第に改りて良き方に赴く有様を形容したる語にて、野蠻無法の獨立に反し、一國の體裁を成すと云ふ義なり」(「文明論之概略」卷之一)。

文明といふ言葉は相對的であるから、今後さらに人間の文明が進めば違つて來るかも知れないが、今日の段階にあつては、國際間にあつては強食弱肉の状態である。従つて文明は獨立國家において始めて形成される。各家族衆團が

孤立せる状態にあつては、(文中「野蠻無法の獨立」とあるのは勿論孤立の意味) 文明を樹立し得ない。一國とても孤立してゐては十分なる文明の發達を期待し得ない。この點から先生は常に強く日本が富強ならんことを説き、獨立自由の國家たらんことを主張されるのである。而して國家の獨立は個人の獨立自由を基礎とし、學問の發達はかくの如き獨立人に依つてのみ達成される。しかしこの問題は直接學問論には關係がないから、敢てこれ以上ここで詳述する必要はあるまい。

學問を上述の如き性格のものと解した福澤先生は當然經濟學も同一性質のものと解釋する。即ち經濟學の如きも、「唯其定則を知て、之に従はんが爲めなり、譬へば、人身は天然生理の定則に従てよく其生を保ち無恙健康なることを得るものにて、其定則は人の意匠を以て變易改正す可きに非らず、然れども人身窮理を研究するの趣意は何ぞや、唯其定則をして人身の内に行はれしめ、其作用を逞うせしめて、天然を妨ること勿からんが爲めなり、故に曰く、經濟學を研究するは人身窮理を學ぶの趣意に異ならず、(「西洋事情」外篇)。

勿論その後經濟法則の適用は國に依つて事情の異なるものあることを明かに認められてゐる。

「物理學とは天然の原則に基き物の性質を明にし、其働を察し、之を採て以て人事の用に供するの學にして、自から他の學問と異なる所のものあり、例へば今經濟學と云ひ、商賣學と云ひ、等しく學の名あれども、今日の有様にでは經濟商賣の如き、未だ全く天然の原則に依るものにあらず、如何となれば經濟商賣に自由の主義あり、保護の主義あり、其基く所同じからずして英國の學者が自由を以て理なりと云へば、亞國の人は保護を以て道なりと云ひ、之を聞けば双方共に道理あるが如し、左れば經濟商賣の道理は英亞兩國に於て、其趣を異にするものと云はざるを得ず、物理は則ち然らず、開闢の初めより今日に至るまで世界古今正しく同一様にして變遷あることなし、」

(「物理學の要論」明治十五年、全集、正第十卷一頁)。

しかしそれは所謂自然科學と文化科學との區別を判然把握されてゐたのではなく、たゞ漠然今日の場合においては何らかの差異あることを認めてゐたに過ぎない。その學問としての性格においては殆ど同一視されてゐたとみるべきであらう。

三

かく學問に對し數理を尊重し、實學尊重の信念をもたれてゐたことは、啓蒙思想家としての福澤先生の特徴を示すものであるが、どうしてかくの如き信念を形成するに至つたかについて少しく述べて置きたいと思ふ。

一般に儒教的學問觀に依つて養はれてゐた人々が新しい西洋學の實證的學問に接觸する時に、ある者はそのあまりにも卑近な事實に捕はれてゐることに對しむしろ輕蔑の念を以つてみたが、又これに反してその精密な實證的な研究に深く心醉する者もあつた。當時多くの者は前者であつて、淺薄卑近なものとして、假令その確實性を認めても、なほこれを退ける者が多かつた。これに對して福澤先生は深くこれに心醉された一人であつたことはいふまでもない。従つて先生の信念は先生自身いふが如く西洋學に對して心醉された結果に外ならない。勿論先生も後には西洋のことを悉く是認されてゐたわけではない。「自國の形勢をも考へずして、西洋の空談を聞き」といふやうな批判も所々になされてゐる。しかしその學問に對する態度は終始變らなかつたやうに思ふ。従つて前に引用したやうな、「學問を以て學問を滅さんとするの本願にして、畢生の心事は唯こゝに在るのみ」といふが如き強い言葉が出て來たのである。

その西洋文明を批評して、

「方今西洋諸國の有様を見るに、人智日に進て敗局の勇力を増し、恰も天地の間には天然の物にても人爲の事にて、人の思想を妨るものなきが如くして、自由に事物の理を究め、自由に之に應ずるの法を工夫し、天然の物に就ては既に其性質を知り、又其働を知り、其性に從て之を御するの定則を發明したるもの甚だ多し、入事に就ても亦斯の如し、人類の性質と働とを推究して漸く其定則を窺ひ、其性と働とに從て之を御するの法を得んとするの勢に進めり」(「文明論之概略」卷之四)

といふ。西洋文明の近世における異常なる發展はかゝる定則の發見にある。かゝる定則は如何にして發見するか。又かゝる定則ありとする信念はどこから得られたか。明かにバックルあたりの著書から受容されたものと考へられる。バックルは何人も知るが如く、啓蒙思潮の精神をうけて、その歴史研究法においても、物理的要因を重要視し、形而上學的方法を排して、自然科学的思考方法を採用した歴史家である。福澤先生自身も亦バックルの言を引用して次ぎの如く述べて居られる。

「英人ポックル氏の英國文明史に云く、一國の人心を一體と爲して之を見れば、其働に定則あること實に驚くに堪たり、犯罪は人の心の働なり、一人の身に就てこれを見れば固より其働に規則ある可らずと雖ども、其國の事情に異變あるに非ざれば、罪人の數は毎年異なることなし、……」(同上、卷之二)

即ち入事に關しては定則なきが如くみえるが、事實は然らず、その定則は統計法に依つて自ら示される。

「故に天下の形勢は一事一物に就て臆斷す可きものに非ず、必ず廣く事物の働を見て、一般の實跡に顯はるゝ所を察し、此れと彼れとを比較するに非ざれば、眞の情實を明にするに足らず、斯の如く廣く實際に就て詮索する法を西洋の語にて『スタチステク』と名く、此法は人間の事業を察して其利害得失を明にするため缺く可らざるものに

て、近來西洋の學者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ」(同上)。

かくの如き實證的方法に依る合理的議論が儒教的道德に基づく古代理想社會を前提とする議論とは比較にならぬほどの現實性を以つて、若い福澤先生の眼に映じたことは容易に想像される。しかしもし何らの素養なくして卒然これに接したならば、假令福澤先生といへども、これを理解して自分のものとして身につけることは出来なかつたらう。堯舜の代を理想とする回顧的理想主義から一躍して將來への無限の發展を豫期する前進的理想主義に變化することは容易な仕事ではない。單に從來の教義に對する反抗心といふだけでは不十分である。反動のみに依つては時に極端な模倣に變化することはあつても、その人の生活原理として生涯の指導理念とはなり得ない。

福澤先生の實證主義的科學的世界觀は偶然に生じたものではない。勿論當時の日本が最も強く要求したのも科學であつた。従つてかゝる現實的要求が一層先生の信念を強めたことも明かである。しかしその要求を受け容れるだけの素地が日本の學界に存してゐたことも認めなければならぬ。こゝに日本における合理主義發達史を述べるつもりはない。たゞ享保以後漸次に強くなりつゝあつた合理的・實證的思想の存してゐたことを指摘すればよい。享保以後における蘭學思想の發達がそれに大なる貢獻をなしたことは敢ていふまでもあるまい。關孝和以來の日本數學の發展も亦恐らく考慮に容れるべきであらう。従つて幕府後半において本多利明・海保青陵・伊能忠敬・三浦梅園・佐藤信淵等の一群の合理主義的思想家を生んだのであつた。

かうした思想の流れが當時の知識階級の間漸次に一般的になりつゝあつたことは、先生の「自傳」の一節を見ても推定される。

「又當時世間一般の事であるが、學問と云へば漢學ばかり、私の兄も勿論漢學一方の人で、只他の學者と違ふのは、

豊後の帆足萬里先生の流を汲んで、數學を學んで居ました。帆足先生と云へば中々大儒でありながら數學を悦び、先生の説に鐵砲と算盤は士流の重んずべきものである、其算盤は小役人に任せ、鐵砲を足輕に任せて置く、と云ふのは大間違ひと云ふ、其説が中津に流行して、士族中の有志者は數學に心を寄せる人が多い。兄も矢張り先輩に倣ふて算盤の高尙な所まで進んだ様子です。〔福翁自傳「二四頁」〕

勿論それだからといって儒教の堯舜的理想主義がその力を失なつたわけではない。依然として力強く知識層の人々を支配してゐたのである。たゞこれを打破すべき素地が時代の要請と共にすでに存してゐたことを指摘するに止まる。かゝる歴史的背景の下に福澤先生の思想は生まれたのであり、その意味においては偶然ではない。従つてそれが時代的制約を受けてゐることも亦止むを得ない。

福澤先生の議論がその實踐性を高調し、時に最も卑近な實利主義に近い議論をされてゐるのも、當時の學問論——殊に儒教的學問論の弊害を救済せんがためであり、その意味では反動的な傾向さへみえる。しかし先生は學問を以つて文明發展の唯一の手段とし、その學問は數理を基礎とするものであるとし、これが普及にその生涯をかけられたのであつた。それは一二の人間の自覺を求むるのではなく、全日本人の反省を求むるものであつた。故に「文明論之概略」の序文において、

「文明論とは人の精神發達の議論なり、其趣意は一人の精神發達を論ずるに非ず、天下衆人の精神發達を一體に集めて、其一體の發達を論ずるものなり、」

といへるが如く、日本人全體の精神的改造を試みんと欲してその全力を傾注されたのであつた。日本において數理學と獨立心とを缺けるを慨して、

「全く漢學教育の罪であると深く自から信じて、資本もない不完全な私塾に専門科を設けるなどは逆も及ばぬ事ながら、出来る限りは數理を本にして教育の方針を定め、一方には獨立論の主義を唱へて、朝夕一寸した話の端にも其必要を語り、或は演説に説き、或は筆記に記しなどして、其方針に導き、又自分にも様々工夫して躬行實踐を勉め、ますく漢學が不信仰になりました。今日にても本塾の舊生徒が社會の實地に乘出して、其身分職業の如何に拘らずの物數理に迂濶ならず、氣品高尙にして能く獨立の趣意を全うする者ありと聞けば、是れが老餘の一大樂事です。〔福翁自傳「一九八頁」〕

又いふ。

「上等社會にして其知識の卑しきこと實に驚くに堪へたり、畢竟物理を度外視するの罪にして或は人にして馬に若がすと評せらるゝも之に答ふるの辭なかる可し、我慶應義塾に於て初學を導くに専ら物理學を以てして諸科の豫備と爲すも蓋し之が爲めなり」(前掲「物理學の要用」)

と。先生が如何に自己の信するところを行なふに忠實であるかを知ることが出来よう。先生の議論は啓蒙的であり、従つて通俗的である。動もすれば江戸時代の儒者の議論と大差なきものと誤認されがちである。しかし上述したところに依つても明かであるやうに、根本的に大なる差違がある。それは復古的理想主義でもなく、無計畫な實踐主義でもない。數理を尊重し、定則を發見し、計畫的に將來に理想社會をもつ實證主義である。しかもこの信念に向つて積極的に努力された點に私は先生の最も偉大なる面を認むるものである。

四

以上で大體先生の學問に對する根本的觀念については述べ終つたのであるが、先生は所謂學問の神聖といふやうな

ことは云はれてゐない。學問は實踐するものであり、人間日常行爲の指針である。しかし他方人間が文明を發達させた唯一の方法であるから、あらゆるものうちで最も尊重すべきものである。従つて學問が他のものに利用されて誤れる方向に向ふことは避けなければならない。殊に政治との關係が最も問題となる。學問の實踐を主張し、經濟學者にして金持たることを是認せる先生の態度からみれば、學者自ら政治に携ることを是認せざるを得ないやうに思はれる。この點について少しく先生の議論を追及する必要があるやうに思ふ。

その前に少しく先生の用語を整理して置く必要がある。先生は學者といふ言葉を廣狹二義に用ひられてゐるやうに思ふ。一つは學問を修得した者ではあるが、その専門家ではない。廣義に學問に従事する者すべてをいふ。例へば明治十九年に説かれた「學者と町人」中の學者の如きはそれである。

「學問は人生の目的に非ず、學問を學び得て大學者に爲りたりとて、其學問を人事に活用して自身自家の生計を豊にし、又隨て自然に國を富ますの基と爲るに非ざれば、學問も亦唯一種の遊藝にして、人事忙はしき世の中には先づ以て無益の沙汰なりと云ふ可し」(全集、第十卷、八九頁)

と一般人の學問修得の意義を説き、學者の行くべき途が官途にありや商賣にありやを論じ、

「今この學問をして社會の人事に活動せしめんとするには後進の學者少年が成學の後、その打扮を身輕にして何ぐれとなく唯商賣工業に飛入るの一策あるのみ」(同上、九二頁)。

勿論こゝに學者とあるのは、單に學校出身者の意味に外ならない。序でに一言して置くことは先生が當時盛んに所謂學者が商業に従事する必要を力説され、「今の學者は商賣に適するものなり」と高調された少くとも一つの理由には有名な明治十四年の政變が大きく作用してゐることである。

さらに他の一例をそれよりも古いところを探れば、

「今の學者何を目的として學問に従事するや、不羈獨立の大義を求ると云ひ、自主自由の權義を恢復すると云ふに非ずや、既に自由獨立と云ふときは、其字義の中に自から亦義務なかる可らず」(「學問のすゝめ」十編)

この場合の學者も亦恐らく廣義であらう。これに對して學者を學問專攻者の意味に解して使用されてゐる場合がある。この狹義の學者においては嚴に政治に参加することを非とされてゐる。即ち各自の職分を論じて、

「政府は事物の順序を司どりて現在の處置を施し、學者は前後に注意して未來を謀り、工商は私の業を營て自から國の富を致す等各職を分て文明の一局を勤るものなり」

といふ。前述の如く學者の意義を先生は明瞭には區別されてゐないから、廣狹混用される。即ち、

「固より政府と雖ども前後の注意なかる可らず、學者にも現在の仕事なかる可らず、且政府の官員とても學者の内より出るものなれば、此彼の職分同様なる可きに似たりと雖ども、」

この學者は廣義である。

「既に官私の界を分ち、其本職を定めて分界を明にすれば、現在と未來との區別なかる可らず、今國に事あれば其事の鋒先きに當て即時に可否を決するは政府の任なれども、平生よく世上の形勢を察して將來の用意を爲し、或は其事を來たし、或は之を未然に防ぐは學者の職分なり」

こゝ及び次ぎにいふ學者は狹義である。

「世の學者或は此理を知らずして漫に事を好み自己の本分を忘れて世間に奔走し、甚しきは官員に驅使されて、目前の利害を處置せんとし、其事を成す能はずして、却て學者の品位を落す者あり、惑へるの甚しきなり、蓋し政府

の働は猶外科の術の如く、學者の論は猶養生の法の如し、其功用に遲速緩急の別ありと雖ども共に人身のためには缺く可らざるものなり、今政府と學者との功用を論ずるに、「を現在と云ひ一を未來と云ふと雖ども、其功用の大にして國のために缺く可らざるは同様なり、唯一大緊要は互に其働を妨げずして、却て相互け互に相刺衝して互に相勵し、文明の進歩に一毫の障碍を置かざるに在るのみ、」

右は明治八年の著「文明論之概略」第四章末尾の議論であるが、狹義の學者、即ち専門學者の職分を明かにしたものである。先生の學者についての考へ方は、さらにその後、明治十六年の「學問之獨立」において一層明確に規定され、擴充されてゐる。而して官學廢止の必要なる所以を説かれてゐる。少しく重複するが、先生の學問觀を補足し、その學者觀を知る上に重要であると思ふから敢て引用する。前掲の「文明論之概略」に示されたものと同じ叱諭を用ひて、政治と學問との目的を區別した後に、

「我開國の初め攘夷論の盛なる時に當ても、洋學者流が平生より西洋諸國の事情を説て、恰も日本人に開國の養生法を授けたるに非ずんば、我日本は鎖國攘夷病に斃れたるやも計る可らず、學問の效力甚洪大なること斯の如しと雖ども、其學者をして直に今日の事に當らしめんとするも、或は實際の用を爲さざること世界古今の例少なからず、」

といひ、學者の政治に干與することの不可を述べ、さらに一步を進めて、學問の政治からの獨立を主張されるのである。その理由とするところは、大體三點に歸せられる。即ち第一は前述の學問と政治との本質的な差違から來るものである。

「之を要するに政治は活潑にして動くものなり、學問は沈深にして靜なる者なり、靜者をして動者と歩を共にせし

めんとす、其際に弊を見る勿らんとするも得べからず、例へば青年の學生にして漫に政治を談じ、又は政談の新聞紙等を讀で、世間に喋々するは我輩も好まざる所にして、之を止むるは、靜者をして靜ならしめ、學者の爲に學者の本色を得せしめんとするの趣意なれども、若しも之を止むる者が行政官吏の手より出るときは、學者の爲にするに兼て又行政の便利の爲にするの嫌疑なきを得ず、然るに行政の性質は最も活潑にして隨時に變化す可きが故に、一時靜を命ずるも又時として動を勸るなきを期す可らず、或は他の動者に反對して靜を守るの極端は、己れ自から靜の境界を超えて、反動の態に移るなきを期す可らず、畢竟學問と政治と相密著するの餘弊ならん、」

第二は學問教育上の理由である。即ち兩者が十分に分離してゐない場合には、假令「學問所に政談を禁じて多く政治の書を讀ま」せぬやうな禁令を作つても、何らの効果なしといふ點にある。かつ又政治と雖も學問の對象である。濫りに禁ずる理由はない。

「首領の心事と實に偏黨なきに於ては、其學校に何の書を読み何事を談ずるも何等の害をも爲さざるのみならず、學問の本色に於て社會の現事に拘泥することなくして、目的を永遠の利害に期するとき、其讀書談論は却て傍觀者の品格を以て、大に他の實業家を警しむるの大功を奏するに足る可し、」

ここにいふ實業家は勿論廣く現實の仕事に従事する者の意味であらう。先生は水戸における正好兩黨の争ひの例を擧げて教育上の弊害を指摘してゐる。

第三は政治の方針の變化に左右さるゝ弊害である。その例證とせらるゝところは、恰もわが國戰前の弊害を豫見するが如くである。

「東洋全面の風波も計る可らず、不虞に豫備するは廟算の極意にして、目下の急は武備を擴張して士氣を振起する

に在り、學校教育の風も文弱に流れずして尙武の氣を獎勵することを大切なれとて、其針路に向ふ時は、曩に工藝商法を講習して將さに殖産の道を學ばんとしたる學生も忽ち經濟書を廢して兵書を読み、筆を投じて戎軒を事とするの念を發すべし、少年の心事其軟弱なること杞柳の如く、他の指示する所に從て變化すること甚だ易し、而して其指示の原因は何れよりすと尋るに、「兩年間貿易輸入の不公平歟、若くは隣國一大臣の進退に過ぎず、内國貿易の景況、隣國交際の政略、當局の政治家に於ては實に大切にして等閑に附す可らざるものなれども、之が爲に所期百年の教育上に影響を及ぼすとは憐むべき次第ならずや、」

以上學問と政治と密接に關係することの弊害の大なることを指摘した先生は、

「今の文部省又は工部省の學校を本省より分離して、一旦帝室の御有と爲し、更に之れを民間の有志有識者に附與して、共同私有私立學校の體を成さしめ、」

んことを主張されてゐる。かくして學問社會を以つて學者は畢生安心の地と覺悟し、十分に學問研究に従事し得るとしたのである。當時においては先生のいへるが如く政治的權力に左右されることが頗る懸念されたのであらう。今日においてもその弊はないではないが、その他金權等に對しても學者は煩はざるゝことなく、學問は左右されざることを期さなければならぬ。先生のいふ學問の獨立のうちには勿論それも含まれてゐるのである。

上述の如く學問は文明の發達の基礎であり、學問は尊重されなければならない。學問を尊重することについては、古來多くの人のいふところであり、何人もこれには異義はない。しかし單に抽象的に學問を尊重するといつてもそれは殆ど無意味である。學問を尊重することは同時に學問をする人間を尊重しなければ何にもならない。恰も江戸時代の尙農論の如く、農業は重要だが、農民は搾取すべしでは意義がない。學問尊重は學者尊重において始めてその實を

擧げることが出来る。學者尊重は名譽を與へ、金錢を與へるといふことだけではない。學者に研究の時間と餘裕とを與へることである。たと學者を徒らに驅使するは學問を發展させる所以ではない。先生が政治を學問から引き離さんとしたのもそのためである。

しかし他方學者も自己の職分を自覺し、十分矜持も高くもつべきである。今こゝで福澤先生の學者論を詳論する餘裕はないが、先生が學者として如何に高く學者の地位を評價してゐたかといふ一例を擧げて、この一篇を終りたいと思ふ。明治二十四年大槻文彦の「言海」出版記念祝賀會が紅葉館に開かれた時のことである。先生は左の書面を幹事の富田鐵之助に送つて出席を拒絶されてゐる。

「言海祝宴の次第として御示しに相成候一片紙を拜見仕候處、伊藤伯が當日言海の發刊と申を演べ、隨て老生が磐水翁云々と順序あり、是れは其方様の御都合も可有御座候得共、老生は伊藤伯に尾して賤名を記すを好まず候間、誠に恐入候得共、右福澤の名は御取消相成候様奉願候、萬般の理窟を云はず、老生は文事に關して今の所謂貴顯なるものと伍を成すを好まざるに付、假令當日出席を御斷り申上候ても、出席致して云々する筈なりしと申せば、即ち貴顯に尾し貴顯と伍を成したるに等し、故に最初より賤名御除きを乞ふのみ、將又過刻差上候文章は獨立にて呈したるものなれば……別に差出したりとすれば、夫れにて不苦、唯他人の文と一處に紙に上するときは、前以て其體裁を伺度までに御座候、再三小言のやうの事を申上げ、實は老生も心に苦しく、嘸々頭陋なりとの譏も可有之候得共、毎度申上候通り一身の榮辱にあらず、唯斯文の爲めにするのみ、學問教育の社會と政治社會とは全く別のものなり、學問に縁なき政治家と學事に伍を成す、既に間違なり、況んや學者にして政治家に尾するが如き老生杯の思寄らぬ所に御座候、」

以上福澤先生の學問論の概要を述べ、先生の學者としての矜持に論及したのである。先生が啓蒙思想家として極めて大なる功績を遺されたことはいふまでもないが、同時に學問に對して大なる信頼と期待をもつて居られたことを窺知することが出来たと思ふ。先生の哲學、科學論等については、その後の學界の發展と共に、勿論そのまゝに鵜呑みになすべきでもなく、又さうすることは、自ら以つて古をなせといふ先生の獨立論からいつても正しくない。しかし學問に對する先生の信念とその客觀的實證的態度においては、今なほ慶應義塾中の者の遵守して然るべきものであらう。而して先生の學問に對する大なる期待に叛かざらんことを期すべきであらう。(昭和二十二年八月十日稿)

基督教的共產團體

高橋誠一郎

自然兒たる原始民族の單純素樸なる風習は、經々として社會改良に志す者をして財産の共有を主張せしめる主要なる基礎となる。洵に、多數の原始的社會の中に共產主義的慣習の一定形態が認められ得ることは蓋し疑ひの存しない所であらう。原始人は夙に武器、道具、飾具等の動産物件に個人所有權を認めたのであるが、而も、土地所有權の場合に於いては、總ての社會の根柢に横はるものが共產主義的制度であつたやうに見える。

狩獵民若しくは遊牧民の間に於いては、土地所有權は固より何等の存在理由をも有しなかつた。遊牧民の陸を越え海を渡つての驚く可く廣範圍に互つた移動は、彼れ等の土地に關する不注意を物語るものである。動植物獲得に於いて人間労働の演ずる役割が増加し、水草を追ふて轉住するの風が破れ、定住の習慣が起つて後、土地所有權は容易に確立を見るに至らなかつた。土地は十分以上に存在し、且つ耕作方法は猶ほ原始的であつたが爲めに、耕作者は地味を涸渴すると共に直ちに之れを捨て、他を耕作した。屢々引用せらるゝが如く、(又、屢々論争の種となつたが如く)、キーリウス・ケーザルは其の『ガリア戰記』に於いて、ゲルマン民族中最大且つ最好戰的なる狩獵民スウェー